ヨーロッパにおけるロマの差別の根源

―概説的試論―

村　上　嘉　希

序

ロマは今までエジプト出身であるという誤った見解から，「ジプシー」という名称で呼ばれてきた．しかし近年になってやっと，人間という意味を持つ，インドに由来するロマという正式名称が知られるようになってきた．彼らはまたドイツでは「ツィゴイナー」とも呼ばれており，彼らの呼び名は多数存在するのである[1]．

ロマの出身地は彼らの言語とサンスクリット語との様々な類似性からインドであろうと推測され，それは現在ほぼ定説になっている[2]．ロマの歴史は迫害の歴史である．彼らの流浪の始まりについては様々な説があるが，おそらくはかなり長い期間にわたって分散していったといわれる[3]．彼らは家畜を連れて，列を組んで，パンジャブ地方を出発し，ビザンチン帝国を越え，バルカン半島に向かった．そのうちのいくらかはさらにヨーロッパへと移動したが，その他はここにとどまった．15世紀，あるいはもっと以前に，ロマはヨーロッパに流入し始めた．彼らはハンガリーからドイツに到達し，次いでフランスに入った．フランスではボヘミア出身と誤解され，「ボヘミアン」と呼ばれた．彼らのヨーロッパでの立場はきわめて苦しいものであり，しばしば迫害された．

ロマはまず第一に，褐色の肌であるために，ヨーロッパ社会で異質なものと見られた．彼らのその外見は白人中心の社会においては，かなり人目を引いたであろうことが予想される．またヨーロッパはキリスト教社会であり，その教えは当然のごとく人々の意識に染み付いている．キリスト教において肌の黒い者を劣等であり，悪質であるとみなす考え方は定着しており，それはまた黒い悪魔と白い天使という「黒白信条」[4]にも表れている．まずこの根強い考え方のため，ロマに対する偏見はどう

しても避けがたいものだったのである．

差別の原因としてその他諸々が考えられるが，ここではヨーロッパの定住社会と摩擦，軋轢を生み出した要因と思われる特に重要な三つの事項を取り扱う．第一はロマの盗みについてであり，第二はツンフトとの軋轢についてであり，第三はロマの魔術についてである．この三つはいずれもロマの職業と関連しているが，強大なヨーロッパの共同体が別の経済観念に基づく異質な人々を，いかに情け容赦なく非人間的に扱うかがこれらの事例から浮き彫りにされることであろう．

1　ロマの盗みについて

ロマがヨーロッパに到達して以来，彼らが盗みを働いたという申告が目立つ．彼らは見つけた物を何でも盗み，驚くべき技術でスリを行うというのである．この種の記録はすでに15世紀初頭から多数見受けられる．まず始めにライマール・ギルゼンバッハ（Reimar Gilsenbach）の年代記にしたがって，それらの例を挙げてみよう．

●彼らはリューネブルクの街に現れ，プロイセンに到達した後，ハンブルク，リューベック，ヴィスマール，ロストック，シュトラールズントの街々を遍歴した．彼らは集団で現れ，野外の街々の外側に宿泊した．そこで彼らは極めて上首尾に盗みに専念することができた……．彼らは大泥棒であり，特に女性たちはそうだった．彼らの幾人かは捕らえられ，虐殺された．［1417年　ドイツのドミニクス教団の僧ヘルマン・コルナー（Hermann Korner）による］[5]

●そのころ初めて二人の公爵と五十人の男たちや，多くの女と子供たちがやって来た．彼らはエジプトの地からやって来た，と言った．そして盗んで物を手に入れた……．彼らは小エジプトから追放されたとはっきりと認めた．そして占いの技に熟達していると告げた．しかし事態をもっと深くのぞき込んで見ると，彼らは取り押さえられたどうしようもない泥棒やごろつき以上の何者でもない．［1418年（1419?）年　ドイツ（アウクスブルク）ヘクトール・ミューリッヒ（Hector Mülich）による］[6]

●二三の女性たちが占いで注意を引き付けている間，その子供たちがぽかんとしている見物人から財布を奪った……．両替や商品の購入の際，彼らはぺてんの妙技を成し遂げた．［1422年5月　ベルギー(トゥルネー)］[7]

●ロマの公爵夫人はやじ馬たちを占った．しかし未来を予見しようとした者たちの中で，財布を奪われずに戻って来た者はほんのわずかだった．そして女性たちは衣服の部分部分が切り取られているのに気づいた．［1422年　イタリア(ボローニャ)］[8]

●彼らは野原にテントを組み立てた．街々に住むことは彼らには拒まれた，というのは彼らの志は窃盗に向けられていたからだ．［1424年8月　ドイツ(バイエルン)司祭アンドレアス(Andreas)による］[9]

●もっとも悪いことは彼らが話している間に，人々の財布からお金が抜き取られて，彼ら自身の財布へ差し込まれるということだった．それが魔法によるのか，あるいは悪魔の助けか，指先の器用さによるものなのかは分からない．［1427年　フランス(パリ)］[10]

これらの記録を考察すると，ロマは特に女性たちを中心に，占いや会話などを手段として何らかの隙を作り，人々からお金や物品を巻き上げたようである．しかも場合によっては子供たちを使うこともあり，極めて熟達した手腕で窃盗を行ったようである．ロマはまるで盗みしか眼中にない，泥棒や詐欺師の権化のように記述されている．しかしこれらの記録は当時のヨーロッパにおける定住社会の人々の目に映ったロマの姿である．裏を返せばロマが彼らによってどのようにとらえられたかという証明でもある．彼らの発言には軽蔑的な態度が感じられるし，異質な人種に対する偏見も見受けられるのではなかろうか．したがって，これらの記録には幾分かの誇張があることも十分に考えられる．

ロマは確かに盗みを行ったのであるが，流浪生活を行っている彼らの経済状況においては，盗みをせねば生きていくことができなかったのである．またツンフトとの軋轢の章で詳しく述べることになるが，当時のヨーロッパの経済機構は閉鎖的な面があり，外部に対しては著しく偏狭であった．部外者であるロマは生活の糧である仕事が手に入らぬゆえに

盗みをせざる得ない．また盗みをするからといって社会から締め出されれば，仕事を得ることがさらに困難になり，なおさら盗みを行わねばならなくなることは自明の理なのである．こういったところにすでに異質な民族に対する誤解や無理解といったものが見受けられる．

ロマの盗みに対する非難には，定住社会の文化観と放浪社会の文化観の食い違いを原因としている面がある．多くのヨーロッパ人たちは個人の財産が極めて重要な意味を持つ定住社会で生活している．しかしロマは長期にわたる流浪生活においてごく簡単な生活必需品しか持ち運ぶことができなかったため，個人の所有に対する考え方は定住者とは大きく食い違っているのである．

ロマの財産に対する考え方は副次的なものであり，おそらく彼らはかつて原始共産制に似た生活形態の共同体を作っていたであろうと推測される．彼らは共同社会での生活を大切にし，互いに物を進んで分け合った．しかし蓄えるということに関心を持たず，計画的な消費を知らなかったようである．所有に対する観念が希薄なのである．そのためロマは流浪の途中で出くわした物をおそらく何の罪悪感もなく自分の物にしたので，ヨーロッパの定住社会の中で当然軋轢を生み出すことになったのである．

2　ツンフトとの軋轢

ロマの代表的な職業としてしばしば挙げられるものに，鍛冶職がある．彼らはごく簡単なハンマーやふいごなどの道具を使い，卓越した技術でもって釘やナイフや蹄鉄を製造したり，修繕を行ったりした．また籠や桶，櫛や篩などを作る者たちもいた．彼らは極めて優れた職人であり，安い料金で質の良い仕事を行った．

しかし彼らの存在は既成の勢力にとっては脅威であった．15世紀のヨーロッパは都市を中心とした社会であり，都市内では有力な商工業者が市政を牛耳るケースも少なくなかった．当時の経済のシステムとしては城壁によって囲まれた都市領域内をツンフトが支配し，その周辺の農村と交易するというものだった．ツンフトが商工業を受け持ち，農村が農業を受け持って，自治的経済組織の一まとまりを構成するのである．つ

まりツンフトはこの時代の経済の要であったわけであり，ロマは当然のごとくこの勢力の外部にいた．ゲルハルト・ディルヒャー（Gerhard Dilcher）は『ギルドとツンフトの組合の構造』の中でツンフトに関して，およそ以下のような見解を述べている．

都市全体の手工業者を統合するツンフトの設立はおよそ12世紀ごろから始まり，13世紀に普及し始めた．このツンフトを団体として取りまとめる法は兄弟団（Bruderschaft）に基づいていた．兄弟団とはもともと自主的な巡礼参加者の集団から始まった，庶民の宗教的な相互扶助グループであり，およそ11世紀ごろに生じ，一時期ツンフトに統合され，再び分離していった．ツンフトのメンバーは職業によって定めたのであるが，法は兄弟団に基づいていた．それは仕事の秩序のための，また入会金やマイスター選抜をともなう組織の法であった．ツンフトにおいては国王の権限はさして問題ではなく，都市の支配階級の権力が重要であった．ツンフトの設立においては都市の組織階級である僧侶や市長，下級貴族や公共団体の代表者が関与した．商人や下級貴族などと違ってツンフトは政治的話し合いに関してのみ参事会へ接近し，ツンフトによって行われる同業組合の職業ごとの分類は常に参事会や市長の監督下にあった．参事会や市長はツンフトを解散する権限すら持っていた．兄弟団に土台を置くことは特権的同業組合ツンフトに最初から内密な社会的団体の特徴を与えている．

ツンフトは連帯の手段として宴会を行った．そういう共同の飲食はツンフトの慣習の核になっており，相互の社会的接近を促進する．そのさい組織内における平和が培われ，同時に法的な保障がなされる．そのことはツンフト内と宴会において，相手をののしったり，ナイフを抜いたりすることを禁じる法規則においてはっきりしている．宴会は市民の社会的態度を教育する場である．教会生活の機能と死者との礼拝による結び付きはすでに初期のツンフトにも見い出し得る．そして仲間が死亡した場合，その葬儀と同時に遺族に対する生活の保証もなされた．ツンフトのメンバーの手工業者は都市社会におけるその名誉をもはや個人的なものとして心を配るのではなく，同業者的に守るのである[11]．

以上がディルヒャーの論文の要約である．ツンフトの核となる機能と

してツンフト強制（Zunftzwang）が挙げられる．それは原理的には，ツンフト内部においてメンバー間の平等を保ち，外部に対して営業の独占権を保有するというものだった．いわばカルテル的な機能であり，ツンフト内における生産物の価格の統制も行われた[12]．これは最初の内はほんの制度的なものに過ぎず，団体に加入することを強制する程度のものであったが，次第に閉鎖的となり，外部の者たちを徹底的に排除するようになった．ツンフト以外の者たちが種々の手工業を行うことは禁じられた．その上，都市周辺の農民が手工業を行うことも禁止され，彼らは諸々の生産物をツンフトから購入することを強制された．

ロマがヨーロッパに到着した15世紀ごろには親方になることができない職人や徒弟が溢れかえっていた．ツンフトのメンバーが余りにも増え過ぎたため，親方になる試験が難しくなったのである．彼らは親方の資格を得るために親方作品（Meisterstück）を提出せねばならなかったが，それを製作するためには莫大な費用が必要であった．その上，身分上の厳しい条件も課せられたため，親方と血縁関係にある者以外はその地位を得ることが難しかった．そのため親方になることのできない職人たちは労働組合的要素を持った職人兄弟団を作り，ツンフトに対抗した．もちろんこの職人兄弟団は経済的要素のみならず，宗教的，社交的要素も持っていた．15世紀ごろはこの職人兄弟団の最盛期だった．当然のごとく，この時代にはツンフトへの加入においても厳しい制限がなされた[13]．ルドルフ・ヴィッセル（Rudolf Wissell）の『古き手工業の法と習慣1』から例を挙げてみよう．

- クロッセンの仕立て屋は同業組合への受け入れに関して，志願者から次のことを要求している．「志願者は正式に，信心深くて文句がつけられない両親から産まれ，高潔で敬虔ともみなされ，ドイツ人であること．（1500年の免許）」［……］
- 親方になろうとする者はだれでも「堅気の夫婦から産まれねば（1543年の金細工師の法規）」ならなかった．
- キーリッツの町のツンフトの一つへ受け入れられようとする者は，だれでも素性の宣誓を行わねばならない．それは1569年の書式によ

れば次のような内容になっている.「私がきちんとした敬虔な両親としての父母から正式な夫婦の寝床で生まれ，キリスト教徒として洗礼を受け，またヴェンド人ではなく確かなドイツ人の血筋の出身であること，良い立派な素性と日々の営みをする者であること，私が同業組合に有能な者として受け入れられ，拒否されはしないこと，以上のことを私は神とその聖なる御言葉にかけて誓う.」[14]

またこの他，卑しい職業とされる墓掘り，刑吏，皮剝などの仕事を行った経験のある者はツンフトから排除された．異民族はもちろんのこと排除されたが，ロマもその中に入っていた．ヴィッセルも指摘しているように「ユダヤ人，トルコ人，異教徒，ツィゴイナーもまた，彼らが個人的にもっとも尊敬に値する人々であったとしても法的な権利を持たず，それゆえいかがわしかった.」[15] そのためロマはけっしてツンフトへ加入することはできなかったのである.

ロマの手先の器用さは有名である．彼らは手工業においてしばしば天才的な才能を示し，極めて簡素な道具で優れた仕事を行った．以下，クラウディア・マイアーホーファー（Claudia Mayerhofer）の『村のツィゴイナー』をもとに彼らの職業について説明する.

ロマは何の変哲もない自然物や金属廃棄物から商品を作り出した．彼らは仕事場で働いたり，遍歴手工業者として働いた．彼らはよく農場へ行って行商し，農民たちに安い値段で生産物を売った．彼らの仕事の優秀さは農民たちの脳裏にこびりついたはずであり，ロマの商品を好んで買ったことが推測される．前述のようにロマの代表的な職業として鍛冶職がある.「彼らのうち，たいていの者は手工業者としてテントを持って放浪し，ただふいごとペンチとハンマーからなる道具を袋に入れて持っていた．彼らは足りない金床を石で代用した．ツィゴイナーの鍛冶屋は地面の炉のそばであぐらをかいて座った．嫁あるいは妻はそのそばでしゃがんでふいごを操った.」[16] 革と木でできたふいごは貴重品であり，父から息子へ受け継がれることも多かった．釘などの商品を家族が一丸となって行商して売りさばいたが，その際代金の代わりに食べ物や鉄屑を受け取ることもしばしばあった．ロマの中には火を使わないで鉄や板金

を加工する鋳掛け屋や，銅や真鍮を細工して鍋や釜を作る者たちもいた．その他，蹄鉄，くさり，火バサミ，ハンマー，火掻き棒などの製作もロマの得意とする仕事であり，ナイフの製造に関しては，器用にも壊れたノコギリなどから新しい商品を作り出した．ロマのこういったリサイクル能力は着目すべき事柄であり，彼らはこうして安い値段で商品を売りさばくことができたのである．貧しいロマはいぐさや柳や藁などによって籠を製造した．こういった商品はほとんど元手が必要なかった．農夫たちはほとんど自分たちで籠類を製作したが，忙しい場合のみロマから商品を買った[17]．

以上がマイアーホーファーの研究書の要約である．ヨーロッパの既存の勢力について何も知らないロマは優れた商品を安く売り，結果的に市場でツンフトと競争することになった．まるで何者とも分からぬ異質の民族に営業の独占権を侵されたわけであるから，ツンフトの側の反感は推して知るべきであろう．ツンフトはロマを経済的にも社会的にも圧迫した．ロマは一つの場所に定住しようとしても，すぐに追い出されたため，別の場所へ移動せねばならず，流浪を繰り返す羽目になった．またこのような圧迫が継続するとロマは社会の隅に追いやられ，仕事をすることも難しくなり，どうしても盗みや詐欺を行わざる得なくなる．それでロマに対する評判がさらに悪くなり，結局社会的圧迫が増す．こうしてひどい悪循環が生じてくるのである．

3　ロマの魔術

ヨーロッパに到着したロマは占いや治療を民衆に施した．これを行ったのは主に女性たちであり，彼女たちは手相を読んだり，治療薬を調合したりすることに長けていたのである．中世においてはこういった能力は魔術とみなされていた．素朴な民衆はロマの魔術に魅了され，その人気はいやがおうにも高まっていった．

しかし教会はロマに対して反発的だった．ロマがヨーロッパに到着した15世紀には国王との政治権力の摩擦の中で，教会の力はかなり弱体化していた．教会は自分たちの権力を保持するために民衆を服従させねばならなかった．そのため宗教的な権力を脅かす要因に対しては過敏であ

った．ギルゼンバッハの年代記から引用してみよう．

●聖職者たちは占いを悪魔の技とみなしているので，ツィゴイナーと関わりを持つ者は，五十リラ払わねばならず，破門されるということを，聖職者たちは市の役所に公表することを指示している．[1422年　イタリア（ボローニャ）][18]

●肌の浅黒い女性たちが占いを行うという噂がパリの司教に達する．彼はロマの宿泊所に急ぐ．小ジャルドアンという名のフランシスコ会修道士が説教を行い，女占い師たちを信じて，手相を見てもらったすべての人を破門する．[1427年　フランス（パリ）][19]

●ノルマンディーの首都ルーアンに＜エジプト人ら＞の一団が現れる．住民は占ってもらうために彼らのところへ行く．聖なる教会の助任司祭すら「教会の規定に背いて，そして彼の霊魂の救いと彼の共同体を危険にさらして」占い師たちに手相を見てもらう．助任司祭はノートルダムの司教座教会参事会の前に呼び出され，弁解しようとする．その犯罪人は＜エジプト人ら＞の予言を受け入れず，彼らに反論し，彼らが彼自身に該当することを何ひとつ言い当てなかったことを約束する．[1509年７月　フランス（ルーアン）][20]

キリスト教は一神教であり，キリスト以外の神を認めず，非キリスト教徒に対しては厳しい態度を取る．多神教では，様々な神がいるゆえに地上で起こる良くない事件は神々の対立とか，あまり良くない神の成せる業だとかで説明がつくが，キリスト教では純然たる正しきキリストのみであるので，それでは説明がつかなくなってしまう．そこで災害や害悪の原因としてキリスト以外の悪魔という存在が生じてくることになる．混乱した不幸の多い時代であればあるほど悪魔に対する恐怖や憎悪は膨れ上がってくることになるわけだが，ロマが多数ヨーロッパに到着し始めた15，16世紀ごろはまさに混乱期そのものであった．当時，多数の民衆を死へ追いやったペスト，異教徒であるトルコ人によるビザンチン帝国の滅亡，教会の大分裂や教会改革運動に代表される宗教上の混乱，食料不足と貧困，農民戦争など数え切れない程の不安を呼び起こす要素が

あった．そういう社会情勢の場合，何者かに不満の矛先が向けられるのが歴史の常である．そしてその対象となったのはユダヤ人と魔女であった．異民族であり，少数の弱者であったロマもその対象であったであろうことは十分に考えられる．占いや魔術に通じていたロマの女性，特に賢明な老婆の姿はすぐに魔女の姿を連想させる．しかしロマが魔女として取り扱われたという資料は1498年のフライブルクの帝国議会における「ツィゴイナーが魔術師，魔女，詐欺師，犯罪者，ペストをもたらす者として告発される」[21]というのを除いてほとんど見当たらない．浜林正夫・井上正美による『魔女狩り』にはこうある．「……ユダヤ人やジプシーなどの非キリスト教徒は国外へ追放されていた．しかし，実際には少数ながらこれらの異教徒ももぐりでひそんでいて，ジプシーには旅芸人や手品師，占い師などがいたし，16世紀ごろからは黒人もヨーロッパへはいってきていた．しかし，これらの人びとが魔女として迫害されたことはない．(……) キリスト教徒でなければ悪魔の誘惑をうけることはないというのが，その当時の議論であった．」[22]ロマは結局魔女かどうかという以前に異教徒であり，魔女とは把握されなかったようだ．しかし悪魔の下僕やその種のものであるとみられたとは考えて良い．

カトリックとプロテスタントは共に魔術を行う者を排撃した．カトリックの側にとっては超自然的なものに関与したり，神の声を聞いたりするのは聖職者のみができる技であり，祈禱や薬によって病人や怪我人を治すのは教会の特権だった．「中世の間，司祭と女占い師たちは素朴な民衆と貴族の迷信的な魂を求めて競争していた」[23]のであるが，ロマに限らず，魔術を使われることは教会側の権威の失墜を意味していたし，貴重な財源を失うことでもあった．プロテスタントの側は聖書至上主義であり，人間を救うことができるのは神のみと考えていた．そのためにプロテスタントも魔術の存在を認めておらず，人間の超自然的な能力を否定しており，魔術を行使する者の存在はやはり目障りであった．つまりカトリックにとっても，プロテスタントにとってもロマは邪魔な存在だったのである．両宗派の対立の煽りを受け，迫害はなおさら激化したものと考えて良いだろう．

ロマの魔術とは一体どのようなものであったのだろうか．ロマによっ

て行われた主な占いは手相占いとカード占いだった．リューディガー・フォッセン（Rüdiger Vossen）の『ツィゴイナー』からそのやり方の例を引用してみよう．まず手相占いであるが，「手首の関節に多くのしわがある人はだれでも時とともに豊かに有名になる……．親指の下の膨らみは手相術においては（りんご）と呼ばれ，多くの小さなしわが通っていると，これは短い生涯，病気と苦しみが多いことを意味する……．内側の手の平に多数のしわが縦横無尽に通っている長く細い指は，多くの病気を意味する……，つまり太い指は，たとえ多数のしわがあっても，不断の健康と繁栄を指し示す．」[24] といったところである．カード占いであるが，「テーブルの上に指で描いたさかさまの三角形，その上部は現在を，右側は過去を，左側は未来を象徴するのであるが，その三角形の中間点に一枚のカードが置かれる……．さて11枚のカードが三角形の右側に上から下へと敷かれ，同様に左側に，しかし今度は下から上へと置かれ，再び三角形の上部に左から右へと11枚のカードが置かれる．それから円の形に三角形の周りに再び三連の11枚のカードが分配され，その際，下の先から始められ右へ上るようにして分配される．こうして66枚のカードが置かれることになる．残りの引かれない11枚のカードは，カードの蓄えとして三角形の中の最初のカードの下に置かれる．三角形の外部のカードを取るために来客がめくるそれぞれのカードごとに，カード占い師の女性は模様を説明し解説する．」[25] といった具合である．いずれにせよその信憑性は疑わしいといって良い．特に手相占いといったものはロマに限らず，やり方も解釈の仕方も様々であり，かなり疑わしいものである．そもそも血液占いや星占いのように単なる遊びの類いであると見て良い．ロマの占いが的中したという話が残ってはいるが，そういった事柄にはたいてい尾鰭が付くものである．客はロマの巧みな話術によって誘導されたか，風貌や性格からその人生を読み取られたりしたのであろう．

ロマの医療については昔から農村では定評があった．ロマの女性たちは森の資源から様々な薬を調合することができ，その使用法についても詳しかった．どのような治療薬や治療法があったかについてマイヤーホーファーの『村のツィゴイナー』から引用したい．「以前，ツィゴイナー

は瀉血に役立つ血吸いビルを捕まえて売った……．ある農夫は母が頭痛の度ごとに三匹の血吸いビルを額に置いたと語った．たっぷり塩を注ぐことによってのみヒルを取り除くことができた……．心臓病の薬としてツィゴイナー女性は乾いた粉末にしたトネリコ虫を提供した．息切れ，喘息，咳，カタル，気管支炎，肺病のような病気にはツィゴイナー女性は蛇やハリネズミの脂を勧めた……．カミルレやスギナや野生のジャコウソウも他方面にわたる薬とみなされた．食欲増進と胃の不調にはシマセンブリを売った……．シラカバ水はツィゴイナーと非ツィゴイナーによって獲得されたが，ただツィゴイナーによってのみ定期的に売られた．日々の飲用療法に合っているが，ヘアーローションにも向いている……」[26] この他に「……彼女らは妊娠しない女を治す方法を教えたり，農婦の娘たちに売る惚れ薬を調合したりした．」[27] ちなみにロマはイチゴやブルーベリーなどの収集にも詳しく「……キノコの収集においては特別な知識を発展させた．」[28]

なぜロマは薬の調合について詳しかったのだろうか．ロマの故郷であるインドには古来からの伝統医学である「アーユルヴェーダ」というものがある．その医学は近年においても，理論ばかりを重視したため人間性不在の危機に直面している現代医学に対して，人間を生命として取り扱う，宗教性をも包含した医学として再評価され始めている．「アーユルヴェーダ」は科学的な観点から見ても優れており，すでに4世紀以前に成立したといわれる古典『チャカラ・サンヒター』や『スシュルタ・サンヒター』には薬学についての知識が体系的に編まれている[29]．あくまで推測であるが，ロマの医療の知識の根源はこういうところから来ているのではないだろうか．そして長い流浪生活において，森や草地で生活するうちにその知識を実践的に発展させていったのではないか．

結

以上，三つの面において，ヨーロッパ社会が異質なロマ民族をなぜ冷淡に扱ったかについて指摘した．最初のころこそ教皇や一部の領主から通行証や保護状を手渡されることがあったが，時代が推移するにつれ彼らの立場は目に見えて悪化していった．それはある意味，長期にわたる

人種抹殺に等しかった．彼らの置かれた悲惨な状況については，各国において制定された反ロマ法が理解のための良い手掛かりとなるであろう．リューディガー・フォッセンの『ツィゴイナー』から引用する．

- ……彼らを狩ることは許され，彼らを殺すことは完全に合法的だった．［1498年　フライブルク帝国議会　ドイツ帝国］［……］
- 1501年の復活祭までに帝国の領土から離れなかったツィゴイナーを，法の保護を受けないものとして市民が捕縛し殺害することができるという現行のツィゴイナー法を確認する．［1500年　マキシミリアン一世（Kaiser Maximilian I.）ドイツ帝国］［……］
- 流浪しているヒターノス，いまだ職業も仕えるべき主人もなく，ガレー船での労働の罰を課せられたヒターノスの処刑の契機を作る．［1539年　カール五世（Karl V.）スペイン］［……］
- フランドルからのツィゴイナーの追放．［1540年　フランドル］
- スコットランドからのツィゴイナーの追放．［1541年　スコットランド］
- ボヘミアからのツイゴイナーの追放．［1549年　ボヘミア］
- ドイツ帝国における反ツィゴイナー法の先鋭化．すなわちツィゴイナーにはいかなるパスも交付してはならない．三カ月以内に彼らは国を離れねばならない．さもなくば彼らは法の保護をうけないことになる．［1551年　カール五世　アウクスブルクにおける帝国議会］［……］
- ≪自暴自棄になったならず者たち≫に対する法律．ツィゴイナーと浮浪者の通行証は没収され，無効にされる．該当する者はすぐに国を離れねばならない．ツィゴイナーに対して暴力を行使してもだれも罪にはならない．［1579年　ザクセン選帝侯アウグスト（Kurfürst August von Sachsen）］[30]

以上のように彼らは極めて恐るべき扱いを受けた．法の保護を受けないということは傷つけられても，殺されても何一つ文句を言えないということである．彼らは場合によっては全く人間扱いをされず，動物のよ

うに殺された．時が経つにつれ，彼らを捕まえたり，殺したりした者には賞金すら与えられるようになった．焼き印を押されたり，耳を切り取られる者もいた．また「皇帝マキシミリアン一世は1500年のドイツ法を確認した時，ロマをトルコ人のためにスパイを行ったかどで有罪とした……」[31] このことはドイツのツィゴイナーに大きな悪影響を与えたが，容疑の理由たるや彼らが当時のオスマン＝トルコ帝国の方角からやって来たということに過ぎないのである．ロマのスパイ容疑を裏付ける資料は現在においても何一つ残っていない．

ドイツにおける彼らの扱いは特に酷く，この国においてだけで1500年から1800年の間に少なく見積もっても，148の反ツィゴイナー布告が発布されたといわれている[32]．概括的ではあるが，比較的農業も手工業もあまり発展していない東部ヨーロッパでは彼らの扱いはまだ寛容であり，他の住民とそれほど厳しくは区別されなかった．「バルカン半島やハンガリーにおいては，ツィゴイナーは比較的友好的に受け入れられたことは知られている．」[33] 中部，西部ヨーロッパにおいては手工業者の階級組織が進歩していたため，より大きな摩擦を引き起こした．また農村部よりも都市部の方が迫害は厳しく，一般的に社会的な組織化が緊密であればあるほど，迫害は先鋭化するといって良い．

ロマはみずからの防衛のためにキリスト教に改宗して宗教的同化すら試みた．それはキリスト教社会の中で生き延びるための手段であった．しかしキリスト教徒になっても教会に入れてもらえず迫害された．彼らはヨーロッパ人によって宗教を持たないふしだらな人間と思われていたが，それはヨーロッパ人の見地からの判断に過ぎず，実際には先祖崇拝や妖精信仰といった宗教を持っていた．彼らの改宗は確かに外面的なものであったかも知れず，キリスト教を完全に理解していたとはいえないかもしれない．しかし改宗したからには同じキリスト教徒であるはずなのに，ほとんど相手にされなかったことから当時のキリスト社会の排他性が見てとれる．

いままで見てきたところから一貫しているのは，当時のヨーロッパ人の異質なものに対する無理解である．常にみずからの文化を中心と考え，他の文化に対して理解を示そうとしていない．彼らは自分たちと異なっ

た文化を持つ者たちを排除しようとし，そうでなければ18世紀のマリア・テレジア（Maria Theresia）らのように相手の立場を考えず，無理やり自分たちの文化に同化させようとした．当然，そういった同化政策はことごとく失敗した．異質な文化を少しも理解しようとはしなかったからである．文化というものは排他的な性質を持つものであると理解されるが，一個の民族はやはり自分たちがもっとも優秀であると考えがちなのである．ロマは20世紀にナチスによって破滅的な民族粛清を受けるが，これはそういった要素がもっとも顕著な形で現れた例であろう．

ロマに対する差別意識の根は現代においても残っている．1960年代にドイツ人がロマに対してどのような反応を示すかを調べるために，ヒルデスハイムで次のようなアンケートが行われたが，それは興味ある結果を示している．回答者は200人であったが，そのうちの23人がアンケート自体を差別とみなして拒否した．残りの177人は以下のようにそれぞれの集団との接触を拒否した[34]．

ツィゴイナー	177人	ユダヤ人	90人
黒人	148人	イギリス人	70人
ペルシア人	127人	ザクセン人	53人
インド人	124人	亡命者	30人
イタリア人	117人	ラインラント人	20人
外国人労働者	110人	ニーダーザクセン人	16人
無国籍者	108人	ベルリン人	14人
スペイン人	103人	ハンブルク人	14人
フランス人	91人		

ツィゴイナーに対して，177人中177人が拒絶反応を起こしたわけであるから，ロマに対する差別意識は著しいことが分かる．21世紀は人権の世紀であるといわれているが，こういった差別意識を取り払い，自分たちとは異なった文化に目を開かねばならないだろう．ロマには優れた文化があり，特に音楽はハンガリーにおいて，極めて大きな影響を与えた．ロマの非定住の文化を知ることは，視野を広げるだけではなく，ひいて

は我々の定住文化を深く知るための手掛かりになるであろう.

注

1 他にマヌーシュ，ヒターノ，シンティ，ツィガーヌ，チーガンなど五十くらいの名称があるといわれている.

2 例えば語彙において多数の類似した音声が見い出される．ほんの一部を挙げてみると，ヨーロッパのロマ語の agre(終わりに)はサンスクリット語では同じagreである．他にロマ語 ame(われわれ)はサンスクリット語では asme であり，ロマ語 kher(ろば)がサンスクリット語では khara である.
ジュール・ブロック著『ジプシー』　木内信敬訳　1982年　白水社　32ページ参照.

3 Vgl. Puxon, Grattan : *Zur Geschichte der Zigeuner*. In : Kenrick, Donald/Puxon, Grattan/Zülch, Tilman : *Die Zigeuner Verkannt- Verachtet- Verfolgt*, Hannover 1980, S.11.

4 Vgl. Kenrick, Donald/Puxon, Grattan : *Sinti und Roma - die Vernichtung eines Volkes im NS-Staat*, Göttingen 1981, S.23.日本語版は小川悟監訳によって明石書店から『ナチス時代の「ジプシー」』として出版されている.

5 Gilsenbach, Reimar : *Weltchronik der Zigeuner Teil 1 : Von den Anfängen bis 1599*, Frankfurt am Main 1994 ; 2., korrigierte und ergänzte Auflage 1997, S.49.

6 Ibid., S.56.

7 Ibid., S.60.

8 Ibid., S.62.

9 Ibid., S.66.

10 Ibid., S.68.

11 Vgl. Dilcher, Gerhard : *Die genossenschaftliche Struktur von Gilden und Zünften*. In : Schwineköper, Berent (Hrsg.) : *Gilden und Zünfte*, Sigmaringen 1985, S.94ff.

12 Vgl. Mickwitz, Gunnar : *Die Kartellfunktionen der Zünfte*, Helsingfors 1936 ; Reprint Edition, New York 1979, S.159ff.

13 伊藤　栄『西洋中世都市とギルドの研究』1968年　弘文堂書房　292ページ以下参照.

14 Wissell, Rudolf : *Des alten Handwerks Recht und Gewohnheit I*, Berin 1971, S.157-159.

15 Ibid., S.148.

16 Mayerhofer, Claudia : *Dorfzigeuner*, Wien 1987 ; 2., verbesserte Auflage 1988, S.129.

17 Vgl. ibid., S.128ff.

18 Gilsenbach, a.a.O., S.62.

19 Ibid., S.69.

20 Ibid., S.121.

21 Vossen, Rüdiger : *Zigeuner*, Frankfurt/M ; Berin; Wien : Ullstein 1983, S.45. 関西大学人権問題研究室紀要　第33，34号(1996年)にS.62まで小川悟による日本語訳が掲載されているので参考にさせていただいた.

22 浜林正夫／井上正美『魔女狩り』1996年　教育社211ページ.

23 Kenrick/Puxon, a.a.O., S.25.

24 Vossen, a.a.O., S.238-240.

25 Ibid., S.241.

26 Mayerhofer, a.a.O., S.103-105.

27 Ibid., S.125.

28 Ibid., S.102.

29 丸山博監修『インド伝統医学入門』1990年　東方出版　25ページ以下参照.

30 Vossen, a.a.O., S.45-47.

31 Puxon, a.a.O., S.16.

32 Vgl. Vossen, a.a.O., S.45.

33 Suchý, Jaroslav : *Die Zigeuner*. In : Saller, Karl (Hrsg.) : *Rassengeschichte der Menschheit*, München und Wien 1968, S.204.

34 Vossen, a.a.O., S.132-133.

Der Ursprung der Diskriminierung der Roma in Europa

—Eine allgemeine Betrachtung—

Yoshiki MURAKAMI

Die Geschichte der Roma war die einer Verfolgung. Die Roma begannen, in Europa um das fünfzehnte Jahrhundert einzuströmen. Sie waren damals in einer schweren Situation und wurden oft verfolgt. Verschiedenartige Elemente wurden als Ursache der Diskriminierung angenommen. Meine Abhandlung behandelt die drei m. E. entscheidenden Elemente: 1. das Stehlen der Roma ; 2. der Konflikt mit den Zünften ; 3. die Magie der Roma.

1. Seit der Ankunft der Roma in Europa waren Bemerkungen des Europäers über ihren Diebstahl auffällig. Viele Europäer berichteten, däß die Roma, besonders die Frauen, durch Wahrsagen und Gespräche die Schwächen im Volk ausnützen und mit großer Fähigkeit stehlen würden. Die Roma konnten in ihrer schweren Situation ohne Diebstahl nicht leben. Sie waren Außenstehende in der europäischen Gesellschaft. Sie mußten stehlen, weil sie keine Arbeit fanden. Gedanken an Besitz oder Vermögensbildung war sekundär. Sie nahmen das Leben in der Gemeinschaft wichtig und teilten Dinge spontan untereinander auf. Man sagt, sie hätten kein Interesse am Sparen und verstünden nichts von systematischem Verbrauch ; denn ihre Vorstellung von Besitz war schwachentwickelt. Wahrscheinlich eigneten sie sich ohne Schuldgefühl Dinge an, auf die sie zufällig während der Wanderung stießen. Dies rief einen Konflikt mit der festgefügten europäischen Gesellschaft hervor.

2. Es ist sehr bekannt, daß Roma manuell geschickt sind. Sie erwiesen große Fähigkeiten im Handwerk. So wird die Schmiedekunst als ihr charakteristischer Beruf angeführt. Die Romaschmiede stellten Nägel,

Hufeisen und dergleichen mit einfachsten Geräten her und reparierten Metallwaren. Sie waren vorzügliche Handwerker und taten gute Arbeit für wenig Geld. lhre Existenz war folglich eine Bedrohung für die schon bestehende Ordnung im Handwerkergewerbe. Das Europa um das fünfzehnte Jahrhundert war eine Gesellschaft, die die Städte zunehmend zum Mittelpunkt machten. Die Zünfte beherrschten die Wirtschaft in den Städten. Sie hatten kartellähnliche Funktionen mit Geschäftsmonopol und Preiskontrolle. Mit der Zeit wurden die Zünfte exklusiv. Sie begannen, Außerstehende außer Kraft zu setzen. Nicht-Mitgliedern wurde das Handwerksrecht untersagt, der Eintritt in die Zunft streng beschränkt. Das Mitglied mußte frommer Christ sein und aus ehrlicher Familie stammen. Man hielt Juden, Türken, religiös gesehen : die Heiden, für unehrlich. Roma wurden in diesem Sinn auch ausgeschlossen. So blieb ihnen der Eintritt in die Zunft verwehrt, doch konkurrierten sie mit ihr und verkauften gute Qualität zum billigen Preis, ob sie nun von der bereits bestehenden Zunftmacht wußten oder nicht. So setzten die Zünfte die Roma wirtschaftlich und gesellschaftlich unter Druck.

3. Die Roma waren nicht nur geschickte Handwerker, sondern auch Wahrsager und Heiler. Besonders Frauen übernahmen diese Arbeit. Sie waren in der Handlesekunst und der medikamentösen Therapie bewandert. Man hielt im Mittelalter solch ein Können für Magie. Die Magie der Roma faszinierte das einfache Volk. Die Popularität nahm zu. Die Kirche hingegen nahm eine negative Stellung zu dieser Magie ein. Im fünfzehnten Jahrhundert wurde die Kirchengewalt infolge von Machtkämpfen mit den Königen geschwächt. So war die Kirche überempfindlich gegenüber bedrohlichen Elementen. Beide, der Katholik und der Protestant, vertrieben die, die Magie ausübten. Auf katholischer Seite bedeutete das Ausüben der Magie durch die Roma einen Autoritätsverlust, da nur Geistliche im Besitz übernatürlicher Kräfte sein sollten. Auf protestantischer Seite war die Magie ein störendes Element, da eine übernatürlicher Fähigkeit des Menschen verneint wurde. So wurden die

Roma von beiden Seiten verfolgt.

Sie waren Fremde in Europa und wurden dort kaltherzig behandelt. Einige versuchten sogar eine religiöse Assimilation und bekannten sich zum Christentum. Trotzdem blieben sie ausgeschlossen. Es zeigt sich an den oben genannten Punkten, daß die damalige europäische Gesellschaft sehr exklusiv war. Kultur, generell, so meine These, hat exklusive Tendenz. Mein Konzept zur Roma-Diskriminierung deckt sich im wesentlichen mit der Ansicht von Rüdiger Vossen, Donald Kenrick und Grattan Puxon.